

公開シンポジウム案内 p.02

STS Network Japan 2000 夏の学校

『STSによる21世紀の批判的構想』

報告 (実行委員長 夏目賢一) p.03

参加者感想 (石垣良・木村幸・矢谷直子・本田裕子) p.07

「夏の予備校」報告 三村 太郎 p.09

注目集めるコンセンサス会議…農水省も開催 木場隆夫 p.10

再び原子力「平和利用」を問う

—JCO事故から一年に想う— 安孫子誠也 p.11

なぜ生殖技術は進展しつづけるのか？ 不妊治療は何を解決したのか？

『文化としての生殖技術—不妊治療にたずさわる医師の語り』を出版して  
柘植あづみ p.13

STS情報 p.14

# NEWS LETTER

2000 Vol.11 No.2

**STS NETWORK JAPAN**

STSは、Science, Technology, and Society の略称です

## 公開シンポジウム

### 「GMOと科学論・リスク論

### ：現代の科学・技術・社会（STS）論研究」（仮題）

場所：神戸大学国際文化学部・F棟、F-301およびF-401教室

日程：12月28日

主催：神戸GMO研究会、日本科学史学会・阪神支部会

後援：STSNetwork Japan、神戸STS研究会（木ゼミ）、神戸大・立花隆研究会

#### 第一セッション：GMOと科学

時間：午後1時半—3時

司会 三浦伸夫（神戸大・GMO研代表）

話題提供者

佐藤進さん（京大工学部・名誉教授）

「GMOを科学の問題としてどのようにかんがえるべきか：立花隆批判をステップとして（仮題）」

ディスカッサント

杉山滋郎（北海道大学・理学部・科学史）

藺田恵美（神戸大塚原研・立花隆研究会）

#### 第2セッション：GMOを通じて、STSの世界戦略

時間：午後3時半—5時

司会 三上剛史（神戸大・GMO研）

話題提供者

綾部広則さん（東大・GMO研）

「GMOをめぐるヨーロッパ対アメリカという構図

：そして通産・外務・大蔵などによる日本の戦略的位置付け（仮題）」

中島秀人さん（東京工大・GMO研）

「アジアのSTSの動向とGMO：今後のSTS世界戦略の構想と方針（仮題）」

神戸GMO研究会（塚原・平川・春日）

「緑の革命とGMO：サード・ワールド・ネットワーク（TWN）、グリーン・ピース、

ヴィシユス財団、ワールド・ウォッチなどの環境NGO活動から（仮題）」

なお、終了後、懇親会が予定されております。

問い合わせ先：

神戸大学国際文化学部・塚原研究室（tel./fax. 078-803-7435）

STSNetwork Japan事務局（office@stsnj.org）

#### ==事務局より==

秋のシンポジウム「大学（教育）改革を考える（仮）」について

\*上記のテーマにより、11月11日頃の開催を予定していたのですが、大学の独立行政法人化という事態についてどのような方針・立場でシンポジウムをまとめあげるかをめぐり、事務局会議出席者の中で議論が紛糾致しました。討論は二時間半に及びましたがそれでも収束を見ず、秋の開催は困難な状況になっております。

そのため、秋のシンポジウムはひとまず延期し、独立行政法人化及び教育改革全体についてSTSNJがどのように関わっていけるかの議論を更に深めた上で、再度しきり直しを図ろうとの意見で当日は妥結いたしました。

この問題については、会員の皆様からのご意見・提案等をお待ちしております。もし何がありましたら、是非とも事務局までお寄せ下さい。心からお待ちしております。

恒例の秋のシンポジウムについては、上記シンポジウムの後援をもって代えさせていただきます。

# 2000年度 STS NETWORK JAPAN 夏の学校 報告

## 統一テーマ「STSによる21世紀の批判的構想」

2000年度夏の学校実行委員長

夏日賢一（東京大学大学院）

1. 「21世紀日本の構想」懇談会報告書の説明  
隠岐さや香（東京大学）  
夏日賢一（東京大学）  
春日匠（京都大学）
2. 「転換期の科学技術と科学技術政策」  
綾部広則（東京大学）
3. 「説明と理解：科学の文化を研究することについて」  
伊藤憲二（ハーバード大学）
4. 「『21世紀の日本の構想』懇談会による  
政策決定プロセスの見直し再考  
－農薬基準取消し訴訟の結審を例に－」  
角南篤（コロンビア大学）  
中島貴子（東京大学先端研）
5. 「科学技術論の課題  
－ネオリベラル・テクノクラシー批判－」  
柿原泰（東京大学）
6. 「90年代を見る視点  
－歴史的経緯、国家再編／大学再編、  
グローバリゼーション－」  
山根伸洋（日本学術振興会）
7. 「高校新学習指導要領に対する批判・理科（科学）  
教育観を批判する」  
平井俊男（今宮高校）
8. ゲスト講演  
「『アフリカのエリート』について」  
矢部史郎・山の手緑（高円寺ネグリ系）
9. 「GMO問題を分析するにあたって  
－Richard CoyneのTechno-Romanticism  
を使った若干のモデル化の試み」  
塚原東吾（神戸大学）
10. 「科学的公共性の源泉  
－吉野川可動堰問題を事例として」  
加藤源太郎（神戸大学）
11. 「所沢ダイオキシン問題におけるリスク  
コミュニケーションの分析」  
木村宰（東京大学）
12. 「知への帰依と知からの自由」  
松原克志（常磐大学）

今回の夏の学校は「STSによる21世紀の批判的構想」というテーマのもと、故小渕元首相に委嘱された「21世紀日本の構想」懇談会の報告内容をめぐっておこなわれることになった。このとてつもなく大局的な題目がテーマに選ばれたのは、今年が20世紀最後の年であることによっていることももちろんだが、それに加えて今回が「十周年」という記念すべき回であったことも大きな要因であった。そう、今回の夏の学校は十周年記念であった。実際、自分が昨年の夏の学校において実行委員長を引き受けることになったとき、この「十周年」という言葉はちょっとしたプレッシャーだった。少なくとも当初、事務局の中では今回の夏の学校に「十周年」らしい要素を盛り込みたいという意識があった。しかし内実を重んじ、形にこだわらないSTS NJという団体らしきなのだろうか、このような「十周年」にこだわる意識はあつという間に消し飛んで忘れ去られてしまった。もちろん自分自身においても。そうこうしているうちに何も「十周年」らしい企画を考えないままに当日を迎えた。そして結局、この「十周年」は参加者にはほとんど意識されないまま、夏の学校は幕を閉じた。

とはいえ、今回の夏の学校にはちょっとした目に見える特徴があった。まず参加者数が例年を大きく上回る47名を数えた。初参加者数が多かったからである。これはうれしい誤算であった。また、前日に同会場で「夏の予備校」と称して学生を中心とした勉強会がおこなわれた。初めての参加者にも科学論にある程度慣れ親しんだ上で、夏の学校当日を迎えてもらうためである。内容は金森修氏の近著『サイエンス・ウォーズ』一冊すべてをレジュメ発表を通して学んでいくというものであった。こちらは24名の参加者を迎え、雰囲気から推察する限り、夏の学校への導入としては成功したと思う。

目に見える特徴としてはこのようなことが挙げられるが、目に見えない、すなわち夏の学校の内実である議論の内容についても大きな特徴があった。そしてこれこそが「十周年」を迎えるにあたって新鮮さを失うことのない今回の夏の学校の特徴といえるものであった。それでは、これについて以下に報告していく。

プログラムは今回取り上げた「21世紀日本の構想」懇談会の報告の内容説明から始まった。まず、隠岐さんによってこの資料の全体的な内容と基本的な傾向、そしてこの資料の報道のされ方などが紹介された。すなわちこの資料の基盤となる、新自由主義と国民の「市民」化による総動員体制の構築、その体制を保持するものとしての弱者に対するノーマライゼーションの思想、そしてそれをあいまいに包み込む福祉国家的な社会保障理念など。そしてマスコミにとりあげられた英語第二公用語化や義務教育三日制、十八歳からの参政権などの問題が紹介された。次に夏日によって、特に今回重点を置いた第三章で掲げられている分

散協調型ネットワーク社会を実現するために必要とされる、情報技術と生命論的世界観の簡単な解説がおこなわれた。そしてそれらをまとめて、論点を明確にするための発表が春日さんによっておこなわれた。この「21世紀日本の構想」は政治家や学者の理想の最大公約数の提示であり、これは一見したところ「バラ色」の社会であるが、その社会には政府のヘゲモニーが介在し、さまざまな問題点が内在する。たとえばガバナンス、すなわち政府からの統治ではなく下からの協力が協調されているが、ここでの「下からの」とはどのような人たちを念頭に置いているのか、逆にいえばどのような人たちを念頭においていないのかといった問題がある。またグローバル・リテラシー形成などの文脈で語られる個人の自律性・内発性の形成要求は、実質的にそれができる人とできない人の能力格差を助長してしまうのではないのかといった問題がある。そしてこのような論点を紹介した後、今後の指針としてネグリやブルデューをひきつつ「MajorityからMultitudeへ」「グローバル化の不可避性とそれへの抵抗形態の模索」「普遍性という帝国主義と「理性」への反抗」「国家の擁護と新たなインターナショナルイズムの確立」があげられた。しかし春日さんのIT革命をめぐる方針を疑問視する論点に対して、素朴に便利になっている現状の方向性は本当に悪いのかといった指摘もなされ、このような認識の齟齬は以降の議論に持ち越されることになった。そして最後に質問に答える形で、この問題を今回の夏の学校で取り上げたのは、この場で合意を形成することではなく、これらの問題で参加者を攪乱し、そうすることによって、批判的視点を養うことを目的としている旨が述べられた。こうして「21世紀日本の構想」懇談会の報告の内容説明がおこなわれ、各講演者による発表に移った。

最初の発表は綾部さんによって、21世紀の科学技術を考える上で不可欠な、現在の科学技術政策の問題についての考察がおこなわれた。科学政策は研究費の投入の仕方によって、ビッグ・サイエンス（資本集約型）とマス・サイエンス（労働集約型）に分けることができ、戦後50年間はこのビッグ・サイエンスが象徴的であった。しかし核融合研究や加速器建設計画を見ればわかるように、このような研究者一人当たりが高額の予算を必要とするビッグ・サイエンスは90年代に入り斜陽化することになる。そして今後このようなビッグ・サイエンスを推し進めていくためには、一つの研究に多様な利害を同居させていく必要があると述べる。つまり、これまでの研究にいかにか他のニーズを開拓できるかが重要である点を指摘する。宇宙開発を例にとると、人工衛星の開発では研究にGPSなどの実用のための研究を同居させることで予算を獲得しやすくしていることが紹介された。

夕食後、伊藤さんによって社会構成主義とカルチュラル・スタディーズの問題点についての発表がおこなわれた。これは「夏の予備校」でとりあげられた『サイエンス・スタディーズ』の理解を助けるという目的もあった。まず伊藤さんは科学の文化を研究する場合、説明的アプローチと理解的アプローチがあるという論点に立つ。そしてブルーアなどの議論を紹介した上で、前者の説明的アプ

ローチ、すなわち社会構成主義の特徴を「因果的に説明しようとする態度」「社会的に解釈しようとする態度」と要約し、そして後者の理解的アプローチ、すなわち「ギアツ的な文化的な捉え方」「非説明的な捉え方」「非クーン主義的・開放的な捉え方」を提案する。そして実際に両者の方法に基づいて自身の研究分野である1920年代から30年代における日本の若手物理学者の量子力学の受容と社会背景との関係について論じ、社会構成主義者の弱点を明示する。しかし中島秀人さん他により、ブルーア以降、実際に科学史家で強い社会構成主義を取っている人はおらず、また現在の社会構成主義者は因果関係を問わないという指摘がなされた。さらには社会背景を扱う科学史家はだれもが少なくとも弱い社会構成主義者であり、後者の理解的アプローチもそれに含まれるという指摘など、社会構成主義をめぐって議論が白熱し、その夜はその勢いにまかせて懇親会へと流れ込むことになった。

明けて2日目は角南さんと中島貴子さんの発表で始まった。この発表では懇談会資料における政策決定プロセスの見直しの論点、すなわち「アカウントビリティの確立（官主導から民主導へ＝政治主導へ）」「情報公開」「政策決定の参加者の多様化」は方向性としては適切であるが、これは以前からわかっていたことであり、これらを実現していくための批判的論点が必要とした上で、この問題を農業基準取消し請求訴訟の結審を例に論じられた。この例では、被告が科学的常識では考えられない証言をしても、裁判官が科学的専門性に乏しいために見抜くことができないといった点や、原告・被告ともに科学的データを用いるとしても、その（動物実験による）データを人間に適用する場合に掛け合わせるセーフティー・ファクターにおいて一定の不確実性が生じてしまい、結局は科学論争ではなく手続き論争に移行してしまい基準が変わらないままであるという点、またそうした場合、アクター間の政治力が影響しやすくなってしまった点が指摘された。そして理想と現実のギャップをめぐる考察として「政策での科学の不確実性を扱う問題において、市民の側からの「政治主導」は十分か」「利益誘導型政治、構造的な政治力の不公正という現実問題への視点が欠如している」「レギュラトリーサイエンスの存在意義が十分に認められていない現実との関連」「国民の広範な関心を背景にした政策論議が前提となるが具体策が見えない」などの問題点が指摘された。そして角南さんによって、科学的データが用いられても、それに思惑のある「さじかげん」が含まれてしまう現状と、そのような場合に政策過程でのアカウントビリティはどのように形成されるのかといった問題点が強調された。これについての議論では、行政の決定プロセス公開を求めるために「不安」が原告適格になっているために、その公開が実現されにくくなってしまった点や、原告・被告ともに裁判官を選べない、また高等裁判所の裁判官は罷免することもできないなど、実際のその裁判をめぐっての質疑応答がなされ、司法改革の必要性が確認された。

続いて柿原さんにより、現行の科学技術体制をネオリベラル・テクノクラシーとして捉え、批判していくという発

表がなされた。まず新自由主義について、グローバリゼーションの名のもとに一元化を求める一方で多元化・個性化を求め、また新保守主義やナショナリズムと結託し、国家と法への統一した関与を求め、そうした中で選別と排除がおこなわれてしまうといった問題点を指摘。その上で「21世紀日本の構想」懇談会と密接な関係のある79年大平首相の政策研究会を引いてその問題点を明示し、さらに実際に日本の科学技術政策は「科学技術立国：techno-nationalism」路線であり、ここでの国際化は国粹化ではないかといった点を指摘した。そして原子力問題をモデルケースとして論じたあと、ネオリベラル・テクノクラシーとしての特徴として「常に変化を求める態度」「上からの改革だけでなく下支えの調達」をあげ、さらにこのネオリベラル・テクノクラシーに関与することで自動的に政策形成者の意図に絡み取られてしまうという仕組み、すなわち市民参加の陥穽が論じられた。そして最後に技術者教育「改革」の問題をこの文脈で捉えることで浮上する技術者倫理などの問題点が論じられた。この発表をうけて「カウンター・テクノクラートでは政策論争には勝てない」といった主張をめぐっての議論や、ネオリベラル・テクノクラシーとして現在の科学技術体制を捉える上での議論が起こった。さらに議論は新自由主義の一般的な問題に移行し、ガバナンスといっても政策形成者によって意見の選別がおこなわれ、長期的に見ると、これには人間を開発するという意図を盛り込むことが可能になる。すなわちその結果、家父長制や封建制といった暗黙の権力構造を生み出すのではないかというような議論が起こった。それをうけて、成城大学の村上さんが、自身の研究分野であるゲイ・スタディーズにまつわる都政における新自由主義的な意見排除の例をあげたり、またしかし中島秀人さん他が水俣病問題などの例をあげて、実際に30年前に比べれば自由に意見が言えるようになってきているのではないかといった意見を出し、午前の予定を押すほどに議論が紛糾し、ここで昼食の時間となった。

午後の最初は、山根さんが懇談会資料の問題を念頭において、戦後日本の歴史的経緯の確認とグローバリゼーションをめぐる問題点について発表した。まず歴史的経緯では、新自由主義の源泉、また生産と消費の現場でのヘゲモニー確立の過程を示し、その現場を統制する体制の構築過程を発表した。次に時間が押していることもあって、当初予定していた大学再編についての話題を割愛し、グローバリゼーションの話題に移った。町村論文（町村敬志「グローバリゼーションのローカルな基礎—「単一化された想像上の空間」形成をめぐる政治学」『社会学評論200号』所収）を参考に、グローバリゼーションを社会学的に研究していく際に、「グローバリゼーションは外圧ではなく、ナショナリズムやローカリズムはグローバリゼーションによってむしろ強められる」すなわち「グローバリゼーションがつねにローカルな基礎を持ち、ローカルな基礎に関する理論抜きには、グローバリゼーションの動態を把握することができない」ことから、周辺部の研究が「周辺の」なものではなく「中心的」なものになることが指摘された。またグローバリゼーションを考える場合に注意すべき点と

して「グローバリゼーションという認識枠組みでは、相互依存関係を直接持たない地域や個人の間ですら、連関了解の認識枠組みが浸透していく」という点、またグローバリゼーションを前提として「ローカルな領域に『単一化された想像上の空間』を共有する層と共有しない層が生じ、両者に緊張状態が生まれる」という点、そして「グローバリゼーションが説得や動員のためのイデオロギー手段へと転化する」という点が、すなわちグローバリゼーションにともなう社会分化が、地域間の不均等ではなく「不均等じたいのグローバル化」になっている点が指摘された。それを受けて、まずグローバリゼーションにおける「国民国家」批判として、G8体制の評価、すなわち資本の浸透力の評価についての議論が交わされた。つぎに新自由主義的政策での実質的な諸権利の引下げの問題について議論が交わされた。ここで「労働運動はダサいのか?」「足を崩しておいて、競争しろということなのではないか」「NGOでこれまでの運動に代わることができるのか」といった点が議論された。またそれまでの議論において混乱して語られていた学的実践（研究）と社会的実践（実際の運動）について、これらの間にはギャップがあり、一方を他方に従属させるのは問題であるといった点も指摘された。最後に新自由主義とは「変われ!」という命令であり、現状維持を許さないものであるということ、またその手法として文脈に関係なく「何でもあり」の手段を用いるため、これがストレスの源泉になっていることが確認された。

続いて平井さんが2003年から実施される高校新学習指導要領の選択教科多様化路線を、とくに氏の担当する理科教育において批判検討する発表をおこなった。まず現行の指導要領の問題点、すなわち多様化・選択化路線を初めて導入し、基礎的・基本的な内容の教育の徹底をうたいながらそれに失敗している点を指摘した上で、新指導要領においてもこの路線が推し進められていることへの疑問が投げかけられた。多様化・選択化路線では、ある科目が受講者数に応じて開講されなかったり、取得が必要な単位数が減ることによって基礎・基本の知識の習得が事実上困難になっているといった問題がある。また、判断が十分にできないままで選択を強制することで、その選択ミスを助長しているといった現状もある。このような現状を踏まえて、科学技術の発達した社会において、判断基準となる基礎・基本の知識がないまま、将来市民として意思決定を迫られるのは良いことではなく、そのためには選択の押し付けを避け、必修として必要最低限の知識習得のための教育を確保したいという主張がなされた。そして新自由主義的体制についてこれまでの議論でも指摘されていたように、教育現場の意見を聞くだけ聞いておいて、政策にはまったく反映しないといった現状への不満にも言及した。続いて懇談会資料にも言及し、全体を通しての所感が述べられた。この発表をうけて、基礎・基本の知識の内容についてどこまでを高校で習得すべき最低限の知識とするかといった議論がなされた。知識の量を期待するよりも、必要な知識を得るための方法を習得することが重要であるといった意見や、その知識を高校側が決定する際に大学が意見を差し挟むことのナンセンスさ、また義務教育週三日制が導入されれば、必要

最低限の知識を教育することすら難しくなり、実質的に知識の内容よりも必要な知識を取得する方法を教育することが重要になるといったことが議論された。

ここまでの午後の発表と議論も予想以上に紛糾したため、夕食までに次の発表をおこない議論をするための時間がほとんどなくなってしまった。そのこともあって、主に柿原さんの発表で議論が収束しないままになっていた「いかに反対派の意見を政策立案過程に反映させていくか」という問題について、神戸大学の本田裕子さんがモデルケースを用いて議論の発展を模索するための提案をおこなった。本田さんは歴史的に見て、第一の段階として近代において大衆の声が政策に反映されなかったことに言及する。そして政府の意見に同調する意見しか聞き入れられないといった現状を踏まえ、第二の段階として大衆の声を政策に反映するために、あえて賛成意見をとることで大衆を議論の場に参加させる事実を作り上げてきたこと。さらにこれを発展させる第三の段階として、市民の反対意見を政策に反映させるためには、賛成派と反対派、そして問題点を発掘する役割を持つ学者を内包した市民的共同体としての「みんなの会（この提案は吉野川可動堰問題を前提として議論された）」を組織し、その内部で意見調整をおこなった上で、その意見を政府に申し立てていく方法がよいのではないかと述べた。それに対して山の手さんによりそのような歴史観の訂正すべき点が指摘された後、議論はこの第三の形態の是非をめぐって展開した。矢部さんが賛成派のほうはその市民的共同体を望まない可能性があることを指摘、そもそも政府に対置する共同体という前提的位置付けによって、図らずもその共同体が政府の別働隊として機能してしまうことになる点を指摘した。続いて篠田さんが、この第三の形態こそが新自由主義の暗黙的な意見選別を孕んでしまう可能性を指摘した。また塚原さんが、吉野川問題における「みんなの会」は重層的な思惑のもとで、反対をあえて標榜しない形で運動しているが、事実上の反対派であるといった点を指摘した。そしてこの議論も紛糾したまま夕食の時間にもつれこんでしまったため、中断される形で終わってしまった。

夕食後は山の手さんと矢部さんにより九州沖縄サミット反対デモに参加した上での所感、日本における沖縄の位置付けへの考察などが発表された。まず特徴として反サミットデモの参加人数が嘉手納基地包囲行動の参加人数に対して少ないという点があげられた。実際サミットの期間中、街中には警官とサミット支援NPOの警護ボランティアばかりというように、沖縄全島で警備が徹底され、住民の外出の自粛なども首尾よく徹底され、デモ運動も盛り上がりなものであった。氏はこの盛り上がりなさが起因するところに沖縄の特殊性をあげる。もちろんこのような住民と行政が一丸となった警備体制は東京では不可能であり、これは地理的条件はもちろん、家父長制が色濃く残る沖縄の県民性を反映していると述べ、そもそも今回のサミットをめぐる言説では少女暴行事件を含む基地問題という沖縄固有の問題が前面に押し出されているという特殊性を指摘した。そしてこのように従属的な性格が沖縄の資源として開

発され、懇談会資料の「東アジアの多国間協調体制」を見てもわかるように、東アジア・太平洋地域の首都機能を担っていくためのガバナンスのモデル地域として位置付けられている点が指摘された。続いてそもそもなぜ「沖縄の県民感情」といわれると納得してしまうのだろうか、この「県民感情」は誰によって作られているのかなどの疑問が投げかけられた。それを受けて沖縄などが頼らざるを得ない補助金財政の問題などが議論された。そして最後に山の手さんにより高円寺ネグリ系の活動紹介がなされ、懇談会資料の第二章にあるようにその活動が「無責任な参加」として行政に位置付けられようとも、対案がなくても「ただ反対すること」の大切さが主張され、発表が締めくくられた。

続く塚原さんの発表は、それまでの予定が延びていたこともあって、氏の計らいにより懇親会との境界を取り扱う形でおこなわれた。まず氏の実家のある岐阜県飛騨町で農協から配られた種イモを栽培したところ、ジャガイモが地上に伸びる茎に（トマトのように）生ったという興味ある事例が紹介された。そしてこれは遺伝子操作実験の種イモが紛れ込んだ結果かもしれないが、農民のリアルティーでは「今年のジャガイモはおかしかった」程度のものであったと指摘。このように科学技術をめぐる認識には、同じ結果でもさまざまな捉え方があるとして、技術に対する立場をTechno-mania (Pro-TechnoScience) と Techno-phobia (Con-TechnoScience) という軸、また Techno-Optimism と Techno-Pessimism という軸で表し、手塚治や中山茂氏などがこの座標空間内でどのような位置にあるのかを分析した。そしてこの議論をGMOをめぐる行政の立場に応用し議論がなされた。また平川さんにより生命技術の概念が新自由主義の文脈で、変化を希求する正統性を示すものとして用いられる例などが示された。しかし結局これらの議論の行方は酒の席へと消えてしまったので、これ以上の報告はできない。

翌3日目は加藤さんの吉野川可動堰問題を事例とする発表で幕をあげた。この問題では建設省を中心とする推進派が出した安全水位としての42 cmという数値が反対派住民の調査結果をうけて撤回された。加藤さんはこの42 cmの検証がlay-expert（専門家ではないが専門家として振舞える市民と定義）によってアカデミズムの閉鎖性を抜け出した公共的空間でなされたとして、この問題をハーバマスの意味での公共性の萌芽を裏付ける事例として解釈した。それをうけて、この科学的公共性をめぐっての議論が展開した。まず内容は工学的のようだが「科学的」とした理由について質問が上がり、それについて今後より広い知の範囲を視野に入れていきたいからといった回答がなされた。続いて、42 cmを表に出さなくなったのは、市民の側の影響ではなく土木学会の解釈が二分したからなのではといった質問や、撤回ではないという結果では公共圏が形成したとはいえないのではといった質問。そもそも行政が表に出す理由は定期的に推移していくものではないかといった指摘もなされ、これらは今後の研究の指針を示すものとなった。もっとも市民運動の結果として撤回されたのではなく

でも、そのように市民の中で評価されたこと自体が公共性を考える上で面白い事例であるといった意見も出た。

続いて木村さんが所沢ダイオキシン問題を事例としてリスクコミュニケーションの問題点を分析し、行政への漠然とした不信や調査の方法的問題点について発表した。そして今後の論点として「化学物質による健康リスク」「行政の不正可能性」「情報公開の十分性」「処理場受容の公平性」「予防原則の必要性および可能性」のそれぞれについて評価していくことの必要性を提案した。それをうけて不信・不安を定量的に評価するとき各人の認識バイアスをどのように考えるべきかといった議論や、住民意識の中でダイオキシンとは直接関係がないと考えられている症状の原因もダイオキシンに還元されてしまうというのはあたりまえであり、その「生の感覚」をいかに評価する項目を作っていくかといったことが課題であるといった議論がなされた。そして平川さんによりリスクコミュニケーションをおこなう上で「安心すればいいのか?」といった根本的な問題点も今後の課題として提示された。

そして夏の学校のプログラムの最後を飾ったのは松原さんの発表であった。この発表で、今後の社会で個人が知識を持つ(資源化される)ことは、その個人の過失責任を考える上でどのような意味を持つのかという問いが投げかけられた。過失の認定においては、結果回避可能性と結果予見可能性の両者が認められることが必要とされるが、裏を返せばそのための専門知識を持たないほうが罪が軽くなるのではないかと、いったテーゼが立てられる。そしてJCOの事故を例にとり、(原則として個人を裁く)刑事裁判において臨界事故をおこした作業員をどのように裁くべきかといった議論がまさに現在の問題になっていると報告した。作業員の専門知識の乏しさをどのように評価するかという問題である。しかしこのJCO事件の評価については議論が巻き起こり、とくに原子力産業などの組織の中では知識を持っていても、その意見が作業過程に反映できないといった問題点が指摘された。しかし組織の責任は、個人を追求していく裁判の過程で量っていくしかないという現実問題に立って考察する必要性も指摘された。そして最後に「雪印」の問題に言及し、知らないことで責任を負う可能性についても指摘がなされた。

こうして、今回の夏の学校は幕を閉じたわけだが、以上の報告でもわかるとおり、今回の議論を振り返ると予想以上に懇談会資料を中心として議論がまとまったと思う。論点をまとめると「新自由主義的な行政の決定過程に、いかに多様な人々の意見を反映させるか」というところであろうか。もっとまとめると「新自由主義」というキーワードをめぐる議論であった。今回の夏の学校のテーマであった「STSによる21世紀の批判的構想」について、参加者がどれほど21世紀への構想を持てたかは、議論に結論を求めなかった以上、各人の評価に委ねるところではある。しかしさまざまな方向から20世紀の批判的視点を養う継ぎには十分だったのではないかと。そうした意味で今回の夏の学校はとても有意義なものであったと思う。もっともこれらの評価は当ニューズレターに掲載されるであろう参加者

の感想から推し量っていただきたい。

最後に、今回の夏の学校ではさまざまな方に助けていただきました。テーマや懇談会資料の取り扱いについてはとくに春日さんに、実際の事務仕事の多くは隠岐さんに、そして総合的には中村さんをはじめ、事務局を中心とするさまざまな方に多くを助けていただきました。これらの方々への御礼をもってこの報告を締めくくりたいと思います。ありがとうございました。

## 参加者の感想

石垣良 (東京工業大学)

はじめまして。STSNJ夏の学校に初めて参加した、東京工業大学理学部の石垣と申します。以前から、科学技術が産み出す社会的問題、科学技術と社会の関係について興味があり、2000年度夏の予備校・夏の学校に参加しました。

夏の予備校は、内容が難しかったというのが正直な感想です。テキストの予習が十分でなかったという反省はありますが、金森修さんの『サイエンス・ウォーズ』は、僕にはかなりハードルが高かったです。「エコ・ウォーズ」など、自分の関心と一致する文章は読みやすかったのですが、ある意味では本番の夏の学校よりも苦戦し、悔しいと思うと同時に、これから科学技術論の学習に力を入れていきたいと思いました。

夏の学校のテーマは「STSによる21世紀の批判的構想」ということで、これは僕が特に興味があるテーマのひとつでした。「21世紀日本の構想」懇談会の報告書を見たのは今回が初めてですが、実際に読んでみて、ネオリベリズムの負の側面を綺麗事で誤魔化すことすらもしていない文章だと思いました。「国家は国民を教育する権利を持つ」という無茶苦茶な新概念など、公権力による統治が全面に押し出されている点が気になりました。発表の中では、柿原泰さんの「科学技術論の課題—ネオリベラル・テクノクラシー批判—」が特に印象に残っています。「市民」と行政の話合いのテーブルが用意されることで、システムや政策に対する根本的批判が押さえ込まれるというのは、まさに僕たちが現在も抱えている課題ではないかと実感しました。

夏の学校のもう一つの主役は、夜の交流会だと思えます。色々な立場の人と自由に話ができる機会はとても貴重で、そして楽しいものでした。初めて知り合った人たちとも、酒を交えながら色々な議論ができました。ひとつの希望ですが、他の人に声をかけやすいように、是非胸に付ける名札が欲しいと思いました。今回、夏の学校に参加してとても良かったです。これからもできるだけ、夏の学校に参加していきたいと思えます。

## 木村宰（東京大学）

私は"STS"という言葉を大学院に入ってから初めて聞いたので、まだ数ヶ月のつきあいしかなく、当然夏の学校も今回が初参加だった。"STS"とは何なのか、STS-NJはどこなところなのか、まだまだ分からないことばかりだが、夏の予備校・夏の学校では本当にたくさんの刺激を受け、多くのことを学ばせていただいた。ありがとうございました。

まず夏の予備校では若い人のすごさに圧倒された。博士課程の人だけでなく修士の人、時には3、4年の学部生の人までが、それぞれの専門分野に関した深い知識と考察を、読書会の議論の中でSTS的な問題にからめて活発にたたかわせており、「学生だけでもこれだけ有意義なディスカッションができるのか」と驚いた。一部、知らない人物の名前や概念が登場しまくってついていけないところもあったが…。夏の予備校には、お金や時間のことから参加しようかどうか一時迷っていたが、本当に参加してよかったと思う。

夏の学校では、思ったより多様な分野の人が集まっていた。科学史や科学哲学だけでなく人類学、社会学、教師、左翼運動家、など広範な分野からの参加があり、それぞれのアプローチや問題意識を垣間見ることができて興味深かった。特に人類学の人たちが問題提起していた多元主義的な考えやネオ・リベラリズム批判には目から鱗が落ちる思いがした。

また、住民運動に実際にに関わりながらそれを対象とした研究をしているという人にも何人か会うことができた。運動と研究の狭間でどのような道をつくっていくか、ということについて議論したり教えてもらったりすることができ、とても嬉しかった。またこの点に限らず、夜の懇親会（飲み会？）は私のように日頃STSについて議論できる場をあまり持たない者にとって大変有意義で、かけがえのない場であったと思う。

今回参加して一つ疑問が残ったのは、あの場全体が科学的知識に対して少し相対主義に偏り過ぎているのではないだろうか、ということだ。科学の特権的地位を剥ぎ取るまではいいのだが、「これこれの科学的方法では、これこれのことが明らかになっている」というデータを全く踏まえずに議論を発散させているような気がしたことが、何度かあった。科学主義に偏った人がもっと参加して、議論に加わってけばもっと有意義な場になるのではないかと思った。来年もぜひ参加したい。

## 矢谷直子（一橋大学）

今回、「夏の学校」でSTS-NJへ初めて参加させていただきました、一橋大学の矢谷です。人類学をディシプリンとして第三世界における開発と女性の問題を研究領域としています。STSについてはほとんど予備的知識を持っていなかったのですが、「予備校」に参加して『サイエンス・

ウォーズ』を読み、まずその問題構制が人類学で現在問題となっていることとほとんど同じであることに驚きました（これは単に私の不勉強で、STSと人類学の学史的背景を現代思想史的状况に辿っていけばいよいよ当然なのですが）。

科学的知識の普遍性に対する、社会構成主義的批判に基づくフェミニズムからの告発や、マイノリティによるエスノサイエンスの主張は、人類学におけるカルチュラル・ウォーズとまったく同じ構図です。西洋中心主義的科学への批判から来る民族的特殊性の主張が、第三世界においては保守派に政治的に利用されて民族主義を助長したり、現状維持的立場を追認し、女性に抑圧的に働きかねないという問題点の指摘など、サイエンス・ウォーズとカルチュラル・ウォーズ、そして第三世界のフェミニズムが、まさにリンクする地点なども指摘されていました。

問題意識やアプローチの方法が近かったせいか、どの議論も大変興味深く参考になりました。今回特に印象深かったのは、STSでは科学・技術に関わる公共政策や社会的な問題へのSTS研究者の貢献ということが、学の目標として明確に意識されている点です。これは、私が専門とする「開発の人類学」の分野において、特に日本では、開発援助の現場やその計画立案過程での議論への貢献ということについて、あまり熱心でない業界的なムードに比べて対照的であるように思われました。もちろん、開発現象自体を問題視せずに、いわば、開発という目標達成のために、手段的に人類学的な知識を動員する応用人類学的な立場には私も反対なのですが、現実には、JICAやその他の開発援助機関や、様々なNGOの現場で実際に活動している人たちの議論において、人類学的な言説があまり浸透していない現状に出会うにつけ、人類学内部だけでの議論へと閉じこもりがちな業界的態度の問題性を感じます。沈黙することそれ自体が十分に政治的なアクトなのだとということが明らかである現在、人類学がどのようにその成果を持って、具体的な社会的出来事に関わっていくことが可能なのかということが、これから研究を続けていく中での重要な課題の一つであると思っています。そうした意味で、STSの現実の日常社会における科学・技術に関わる問題や政策への関与の意志や目配り、「科学的公共圏」といった問題構制からは、学べるものが多いのではないかと思いました。これからの議論の発展が期待されます。

## 本田裕子（神戸大学）

7月27日夜、神戸を発つ。夏の予備校の課題図書も半分程しか読めておらず、理解力のなさを実感しつつも、各地のSAでお土産を見た途端、そっちに夢中になり、観光気分で見地に着いた。温泉に入り、風穴を見て、ほうとうを食べたら、そろそろ始まる、いい時間だ。

知らない言葉や人名ばかりなので、難しいのはもちろんだが、それよりも、いろんな方の考えが聴けたことが、非常に楽しかった。とはいうものの、後悔先に立たず。未読の部分は、さっぱり解らない。必死になってついていこう



とするものの、本の中で説明されているかも知れないと思うと、訊けなかった。しかし、一番苦労したのは、参加者の名前を覚えることだった。そんなに大量に憶えられないからだ。名札制にしてくださいと良いのに。

夜の飲み会は初対面の方々と仲良くなる機会であったが、吸収する知識量は昼間と変わらないので、頭はフル回転だった。

30日の昼前の発表で、応酬が激しくなった。議論の中心になっていた点を知り合いの院生に尋ね、また自分の考えを聞いて頂いていると、時間が余っているとかで、急に、それを前で発表することになってしまった。

怖くて震えていたものの、何とか発表が済んだ。最後のほうは、伝えたいことができて、楽しくなってきた。だが、内容が分散して、結局何を言いたかったのか判らなくなりそうで、それが怖かった。

発表が済むとすぐ、ゲストの山の手緑さんに怒鳴られた。いい加減な思いこみの知識で発表したのだから、当然なのに、涙が出た。よく分かっていないことを例に使うことは、とても危険なのだ実感して、怖くなった。また、その分野を研究しておられる方に失礼なのだとも思った。

危険を認知し合い、問題に対する考え方を発表することも、とても大事なことである。だが、私が言いたかったことは、折角集まっているのだから、それをういてどう今後につなげるのか、または用いたくない手段なら、代わりにどうすればいいのかを話し合った方が良いのではないか、ということだったが、あの下手な発表で伝わったかどうか。

ともかくその発表がきっかけとなって、その後、沢山の方がいろいろと教えてくださるようになった。それがとても楽しく、嬉しかった。

この勉強会に参加して、実際どれほど知識が身に付いたかは甚だ疑問だが、本当に良い体験だったと思う。

最後になりましたが、この会に連れて行ってくださった塚原先生をはじめ、この会をアレンジして下さった方々や、その他皆様に感謝しております。本当に有難うございました。

---

## 「夏の予備校」報告

三村 太郎 (東京大学)

去る7月28日、夏の学校に一日先駆けて、初めての試みである「夏の予備校」が開催された。

開催当初の趣旨としては、夏の学校に初めて参加するような「STS初心者」が、夏の学校期間中に展開される議論へスムーズに入っていけるように、例えば基本タームを解説したりするような場・予備校を設けよう、というものだった。

まず「予備校」の基本図書として金森修『サイエンスウォーズ』(東京大学出版会)を選んだ。本書を読んでも分かることだが、言及されている文献が大変豊富で、

今後の研究指針を得るにはとても重宝する文献であることは確かである。その点で『サイエンスウォーズ』は、今後のサイエンスウォーズ、ひいては科学論の基本文献となるだろう。今回「予備校」で『サイエンスウォーズ』を取り上げたことは、基礎を固める「予備校」の性格と結果的にうまくマッチしたと言える。

そして「予備校」の形態としては、章ごとに内容をレジュメ報告する担当者を一名決めておいて、レジュメ報告後に疑問点のディスカッションを行う、というものを取った。

当日、24名が集まり、午後3時頃「予備校」は開始した。参加者の大多数が、大学の学部生、院生で、金森氏の見解に対する批判や、論考の背景となる事情の解説など、さまざまな論議が飛び交った。

だが「予備校」を通じて、当初見込んでいた「ターム解説」は、あまり行われなかった。自由に疑問を出して誰かが答える、という形態のために、あまりにも初歩的な疑問は提出しにくかったのかもしれない。というよりも、初心者には疑問を生み出すこともなかなか困難なものである。または、参加者の大半が大学の学部生、院生だったため、質問する側、答える側の役割分担があまりにもなさすぎたことが原因かもしれない。(とはいえ、誰かの質問に対して誰かが答える、という柔軟な討論形態が本当の理想像ではある。)

ある程度ターム解説を織り込みながら報告するように、報告者側に前もって伝えておいた方がよかったのだろうか。あるいは一番最初にターム解説を講義形式で行ってから、『サイエンスウォーズ』に入るべきだったのか。そして、討論の流れをまとめる責任を持つようなオブザーバー数人を固定しておくべきだったのだろうか。

すなわち、どの程度・形態のレジュメ報告・討論を目指すかは、「予備校」としてどの程度のレベルをねらうのか、という問題と直結し、議論の余地は十分あることが実感できた。(もちろんレジュメ報告→討論の形式以外にも、「予備校」は成立し得る。例えば、講義形式など。とはいえ、ある程度の双方向性を保つには、レジュメ報告→討論の形式が手っ取り早いといえる。)

一方、夏の学校との接続という点では、具体的な内容としてはあまり連続性は見られなかったかもしれない。そもそも、具体的な内容において、夏の学校と連続性をもたせるべきなのだろうか。それよりも雰囲気の連続性の方が、大切なかもしれない。その点では、今回の「予備校」は成功だったといえる。

今回はかなり直前になって「予備校」開催が決まったため、「予備校」の形態にまで議論する時間はなかった。しかし、来年以降も「予備校」を開催するのなら、どの程度のレベルの「予備校」を目指すのか、夏の学校との連関はどうするのか、という問題を今一度練る必要があるだろう。

このように、多くの有益な反省を残しながら、初めての試みである「夏の予備校」は終了した。

## 注目集めるコンセンサス会議

…農水省も開催

2000年9月29日

NPO 科学技術への  
市民参加を考える会

木場隆夫

コンセンサス会議は、日本でこれまで試験的に二回行われてきた。現在、NPOとして活動している科学技術への市民参加を考える会の前身である「科学技術への市民参加」研究会が主催したものである。本ニュースにも紹介してきたが、1998年に「遺伝子治療」をテーマとして関西で行い、1999年に「高度情報社会——とくにインターネット」をテーマに埼玉県で行った。その資金源となったのはトヨタ財団、日産科学振興財団、東京電機大学の研究助成であった。コンセンサス会議の広がりや世界的な趨勢であるとはいえ、日本での取り組みは、細々とした任意団体が行う研究的な位置づけのものであった。

そして、99年末に、コンセンサス会議等を進めていくために本NPOが設立された。科学技術に関する問題についてコンセンサス会議やその他の市民参加の方法を世の中に広めていこうという方針から運動と研究を続けている。STSネットワークジャパンの方も数名加入されている。本NPOはさらに会員数の増加を目指しているの、御関心のある方はぜひ御加入を検討して下さい。ホームページは<http://ccsimail.ccs.dendai.ac.jp/~wakamats/> でみる事ができます。

さて、本NPOでは、7月15、16日に都内において合宿を行い、今後の活動方向について議論した。最近の本NPOの活動は、いろいろな地域や、団体でコンセンサス会議を行ってもらうためにわかりやすいガイドを作成するという事に重きを置いている。このような活動が実を結び、コンセンサス会議の形式の会議を行おうという動きが実際に現れている。

一つは、まちづくりにこの手法を応用しようということで、姫路市においてコミュニティコンセンサス会議が本年7月からスタートした。現在、会議に参加する専門家、市民の選定を行っており、今秋に会議を行い、来年3月に提言をまとめることを目指している。

そして、農水省が遺伝子組換え農作物をテーマとしてコンセンサス会議を行うこととなった。農水省はこのコンセンサス会議の開催を、社団法人農林水産先端技術産業振興センターに委託している。7月にプレスリリースがあり、8月23日を締め切りとして全国から市民パネルを募集した。側聞するところ、市民パネル応募希望者は500人近かったということである。9月15日の第1回会合（東京都港区）を皮切りに、遺伝子組換え研究を行っているつくば地域の視察も含め、4回の会合が予定されている。このうち2回の会合は泊まり込みで行われる。最終的な意見のとりまとめは11月4日が予定されており、注目されるどころ

である。現在、市民パネルにより「鍵となる質問」がとりまとめられた段階である。

このコンセンサス会議が成功するのか、どのような議論がなされるのか、そして研究や政策にその意見はどのように影響するのか、といった興味をもってこの会議を外から眺めてみたい。

### ==事務局より==

#### 夏の学校決算報告

収支	内訳	金額 (円)
収入	収入	766,900
	寄付 (三宅氏)	10,000
	未納分	21,900
収入合計		798,800
支出	宿泊費	741,000
	昼食代	27,200
	ホール使用料	17,500
	消費税	39,285
支出合計		824,985
残高		-26,185

なお、事前調整の不善によりキャンセル不可の宿泊費10,500円が生じてしまいました。

これを含む赤字分は止むをえずNJ会計から補填させていただきます。

申し訳ありません。

## 再び原子力「平和利用」を問う

### —JCO事故から一年に想う—

安孫子誠也

(聖隷クリストファー看護大学)

E-Mail: abiko@ceres.dti.ne.jp

冷戦は、広島に始まり、チェルノブイリに終わったと言われる。冷戦が原子力利用と表裏一体のものであったことは、歴史を振り返ってみれば明らかなことである。核分裂理論の基礎を構築し、マンハッタン計画にも深く関わっていたニールス・ボーアが、戦後の核軍拡競争と東西冷戦を予測して、それを防止すべくあらゆる機会を捉えて奔走したことはよく知られている<sup>(注1)</sup>。また、広島・長崎への原爆投下、戦争を早期に解決して米兵の損失を防ぐための措置であったとする米軍の説明にもかかわらず、実際には戦後を見据えた対ソ戦略であったことは多くの人々が指摘してきたところである。さらに、ソ連崩壊がチェルノブイリ原子炉事故にその淵源をもっていたことも、論を待たないであろう。

冷戦や原子力利用は、我がSTSの成立にも深く関わっている。広島・長崎の惨劇が、科学批判や反科学思想をどれほど助長したかについても、識者の意見の一致するところである。原爆投下、核実験、核関連施設の事故などが、人々に、科学・技術の暴走をそのままに放置してはならない、科学研究・技術開発を市民コントロールの許に置かねばならないとする考えをもたらし、それがSTSの教育・研究へと導いたのではなかっただろうか。無論、環境汚染その他の要因も重要ではあった。しかしながら、原子力ほどに人々を恐怖のどん底に突き落としたものは他になかったのである。

昨年、JCO臨界事故の直後に、筆者はこのような冷戦と原子力利用、あるいは原爆と原発の間の密接な関連性に注意を促すべく、「改めて原子力「平和利用」を問う—即発臨界と原爆」という論考をこのNews Letter誌上に発表した<sup>(注2)</sup>。しかしながら、原爆と原発の間の関連性や、原子力と他の産業技術との間の根本的な違いについて、十分な理解が得られるには至らなかったように思われる。そのことは、野村元成氏による拙論への批判<sup>(注3)</sup>などからも窺えるところである。

筆者が、冷戦と原子力利用のあいだの密接な関連性に気付いたのは、冷戦の終結とともに欧州各国が次々に原子力から撤退していった理由を考えたことが切っ掛けであった。しかし、よく調べてみると、1953年国連総会におけるアイゼンハウアーの「アトム・フォー・ピース」演説そのものが冷戦戦略以外の何物でもなかったことが分かるのである。それを示すために、簡単に原子炉開発の歴史を振り返ってみよう<sup>(注4)</sup>。

よく知られているように、最初の原子炉は長崎型原爆作成のためのプルトニウム生産炉であり、これが今日の高速増殖炉の原型となった。一方、米海軍からは潜水艦推進用の小型原子炉の開発が求められ、これが今日の軽水炉の原

型となった。戦争が終わると、発電用原子炉が求められたが、米国ではウラン燃料枯渇対策と軍事用のプルトニウム生産を兼ねた高速・中速の増殖炉（あるいは二重目的炉）の開発のみが優先され、機密保持が厳重になされていた。ところが、1950年頃になると、ソ連、英国、フランス、カナダ、ノルウエー、オランダなどで相次いで原子炉の建設がなされ、米国の優位が脅かされるとともに機密保持の意味合いが薄れた。そこで、発電用原子炉分野における米国のリーダーシップを維持すべく、1953年5月に米原子力委員会によって原子力法改正提案がなされた。それは同委員会によるそれまでの原子炉独占・核分裂物質独占・技術情報独占を緩和し、発電用原子炉の開発を核兵器開発から切り離して民間へ開放するというものであった。それと同時に、潜水艦推進用の軽水炉を大型化した発電用原子炉の建設計画を発表した。こうして、それまでの軍事目的を兼ねた増殖炉開発一辺倒から離脱し、軽水炉開発への道が開かれたのであった。

アイゼンハウアーによる1953年12月の「アトム・フォー・ピース」国連演説は、このような情勢のもとでなされたものではあったのだが、この演説内容をより大きく規定していたのは、むしろその前年におけるソ連による水爆実験の成功なのであった。

この演説における平和利用推進提案は次のような内容であった。すなわち、「主要関係各国政府が慎重な考慮に基づき、許容される範囲内で、ウランと核分裂物質を、国連の支援で設立される国際原子力機関に供出し、今後も供出を続ける」とし、さらに次のような説明が付け加えられた：「この提案は、腹立たしきや相互の不信を招き易い、世界的な査察管理制度を作らずに実施できる」「国際原子力機関の重要な責任は、核分裂物質を平和的な利用目的に使う方法を工夫することであろう。たとえば、農業、医療への応用や、電気の不足する地域での発電など。」

この提案は、各国が軍事用に保管している核分裂物質の一部を平和目的のために供出するという意味で軍縮提案となっただけなのだが、問題なのは査察管理制度を不必要だとしている点である。査察管理制度の目的は、供出核分裂物質の軍事転用の防止であるが、それを不必要だとしていることは、米国が他国を核武装させる意図があったという解釈が成り立つのである。この解釈は、その前年におけるソ連の水爆実験成功という事実と符合し、さらにこの翌年におけるNATOによる対ソ核武装包囲網構築の決定とも合致している。

我が国における原子力利用具体化の第一歩は、このような情勢のもと1954年3月の国会で成立した原子力予算とともに踏み出された。日本学術会議は、同年4月に公開・民主・自主の平和三原則を求める「原子力に関する平和声明」を発表し、この三原則は1955年12月成立の原子力基本法に盛り込まれた。しかしながら、我が国の原子力開発はこの三原則に基づいて進められたわけではなかった。日本の産業界は、米国製濃縮ウラン軽水炉導入の路線を選択し、それとともに濃縮ウランの対米依存が始まった。これに抗議して、湯川秀樹が三原則支持の立場から原子力委員を辞職したのは有名な事実である。

このような経緯から、我が国の原子力開発もまた、対ソ包囲網の一環として踏み出されたという解釈が可能になるのである。我が国が核武装をしたという事実はなかったのはあるが、我が国における原子力開発はソ連を脅かすに足るものであったと考えられる。このような秘められた軍事的目的の影は、高速増殖炉路線への執着、原子力関連施設での事故の隠蔽、放射性廃棄物の創出など、至るところに見出すことができるのである。

昨年の拙論でも述べたのであるが、原子力技術における要素過程のエネルギーは、他の産業技術におけるその100万倍にも上るのである。これが原爆の巨大な破壊力の源泉であり、チェルノブイリにおけるような原子炉事故の甚大な被害の源泉でもある。人体に及ぼす放射線障害の源泉もこの点に存在し、JCO臨界事故で亡くなられた大内さんは皮膚が糜爛して極めて痛ましいご様子であったと言われている。さらに、事故直後の即発臨界と、その後10時間近くも続いた遅発臨界による周辺住民の被曝実態は最早知る由もないのである。この点は、米国スリーマイル島事故においても同様であり、周辺住民の事故死は報告されていないものの、放射線による晩発障害や遺伝子損傷の実態は調べようがないのである。このような見えない放射線障害も原子力技術に特有な点である。

野村元成氏は、筆者への批判として次のように述べた：「廃棄物やそれが環境中にでた後のことは基本的にまったく視野になかったのが現代技術ではないだろうか。DDTしかり、PCBしかりだ。原子力開発において、廃棄物のことが長年ほとんど留意されることがなかったのは、原子力が典型的な現代科学技術であったことの一側面とみるべき、というのが私の見方である。」しかし、原子力を他の産業技術と同列に論じる氏の捉え方は根本的に誤っていると思われる。DDTやPCBと、放射性廃棄物では、環境中における毒性の持続期間が桁違いに異なるのである。また、DDTやPCBの場合には、廃棄物処理方法は分かっていたのに当初は行わなかっただけなのに対して、放射性廃棄物の場合には、処理方法そのものが分かっていないという違いが存在する。野村氏における、原子力と他の産業技術の同一視は氏の次のような記述<sup>(注5)</sup>にも現れている：「リサイクル路線に対するものは、ワンス・スルー路線と呼ばれる。リサイクルは日本語にもなっているリサイクルの意味と思っておけばいい。」しかし、核燃料サイクルを、通常の意味におけるリサイクルと同様とみなすことは、たとえ原子力推進派の方々であろうともなさらないのではなからうか？

野村氏は化学のご出身と伺っているが、化学の立場からみれば、原子核もその周囲を旋回する電子群も、どちらも元素を規定するものという意味でさほどの違いはないのかもしれない。しかし、物理学的にみればその間には天と地ほどの隔絶が存在するのである。なお、筆者が本稿を執筆する気になったのは、学部時代に「原子核物理学」の講義を担当された森永晴彦先生が、筆者と同様の見解をその著書<sup>(注6)</sup>の中で述べられているのを見て勇気づけられたからであったことを付け加えておきたい。

注1. たとえば、西尾成子『現代物理学の父 ニールス・ボーア』中公新書、1993。

注2. 安孫子誠也「改めて原子力「平和利用」を問う」News Letter, 10(3), No.36, STS Network Japan, 1999.

注3. 野村元成「安孫子誠也氏の“改めて原子力「平和利用」を問う”について」News Letter, 10(4), No.37, STS Network Japan, 1999.

注4. 以下の記述は主として、川上幸一『原子力の政治経済学』平凡社、1974、に拠っている。

注5. 野村元成「第8章 原子力問題の焦点」、調麻佐志・川崎勝編『科学技術時代への処方箋』pp145-167 on p147、北樹出版、1997。

注6. 森永晴彦『原子炉を眠らせ、太陽を呼び覚ませ』草思社、1997。

## 会費納入について

### このニューズレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「99,00未」と「00未」は、それぞれ該当年の会費（3500円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「00不足」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数時が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間です。送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。

## なぜ生殖技術は進展しつづけるのか？

### 不妊治療は何を解決したのか？

#### 『文化としての生殖技術

—不妊治療にたずさわる医師の語り』  
を出版して

柘植あづみ

(明治学院大学 医療人類学専攻)

不妊治療技術（生殖補助技術、最近ではARTと呼ばれることが多い）については、1978年の世界初および1983年の日本初の体外受精による出産の成功以来、多くの問題点が議論されてきた。しかし夫婦間の体外受精や顕微授精は、もう特殊なものではない。その証拠に、1998年までに広義の体外受精を用いて生まれた子どもの数は、国内でも4万人を越え、今後は年間1万人近くの子どもが生まれるとされている。

しかし、体外受精の胚移植あたりの生児出生率はわずか10パーセント代である。排卵誘発剤の副作用による重大事故も生じている。多胎妊娠による妊婦と胎児双方の健康状態の問題も頻繁に生じる。また、減数手術や男女生み分けの是非、提供精子や卵子を用いたドネーション、代理出産の是非や法的規制の必要性に関する議論もある。何より、不妊治療技術がこれだけ普及しても不妊の人たち（特に女性）への偏見は減っていないばかりか、むしろ、治療すれば解決するとみなされる傾向が強まっているという問題がある。

#### 生殖技術に対する医師の意識と行動

その中で不妊の人たちはますます孤立し、長期にわたる不妊治療に耐え、そして先端的な医療技術を受容しつづける。それがさらに、夫婦以外の第三者がかかわる生殖技術や、体細胞から生殖細胞をつくる核移植のような実験を押し進めることになる。では、不妊治療を実施している医師は、これらの生殖技術について、どのような意識を有して行動しているのだろうか？

この本は、このような関心から、不妊治療を実施している医師35人と不妊治療を経験した女性11人に、インタビュー調査を行なった結果をまとめたものである。本の帯に「インタビュー調査から浮かび上がる日本の産婦人科医の生命観・家族観・自然観—医師たちは『患者のため』に新しい生殖医療技術を開発・応用していると語る。患者たちはその医療で悩み苦しんでいる。なぜ、このようなズレが生じるのだろうか？」とある。これは、生殖技術は是非かという問題設定ではなく、なぜ医師はそう考え行動するのかを、専門職の価値規範や技術に対する倫理観、個々人の家族観や自然観、そしてジェンダー観について、医師のライフヒストリー（生活史）や不妊に関する人生経験を考慮しながら、読み解こうという試みである。

本書では、医師の語りをもそのまま引用して、それを医療の部外者の視点から解釈、分析していく。そこに医師と患

者のあいだに不妊治療についての考えや感覚の齟齬が生じていても、医師の有する文化ゆえに生殖技術が存在し進展しつづける様相が明らかになっていく。

#### 本書の構成と内容

本書の構成と内容を簡単に紹介したい。

序章 本書の背景と目的

第1章 これまでの研究と本書の位置付け：先行研究を紹介し、この本の独自性について説明する。

第2章 医師の意識と行動を調査する：調査手法を説明し、インタビュー場面を例に解釈方法を検討する。また、調査対象者である医師の家族構成や医師・産婦人科医になった理由を示し、集団の特徴を述べる。

第3章 不妊治療技術についての医師としての態度：不妊治療諸技術への賛否とその理由について量的分析と質的分析双方による調査対象者集団の傾向を指摘する。

第4章 医療技術の評価—患者の論理と医師の論理：患者の不妊治療体験と医師の不妊治療技術の評価を比較し、通院や治療の負担、インフォームドコンセント、副作用などについての考え方の齟齬を描く。

第5章 医師の「家族」観・「親子」観：親子のつながりとは、「女は子どもをもって一人前」か、などの質問を医師に投げかけ、その意識が不妊治療の臨床とどう関係するかを考察する。

第6章 「自然である／ない」という観念と医師の態度：日本人の倫理基準のひとつともいえる「自然じゃない」という観念について医師に尋ね、その不妊治療との関係を検討する。

第7章 「不妊は病気か」—「病気」概念と不妊の医療化：なぜ医師は不妊を病気とみなすのか、どのような病気だとするのかについて分析する。

第8章 医師としての態度と個人としての態度：「もし不妊だったら、どんな治療を受け入れますか」と医師に尋ねると、医師としてと個人としての態度は違うとする。では、なぜ態度を切り替えるのか。

終章 なぜ不妊治療技術は進展しつづけるのか：不妊が「社会的病気」であることを認識し、個人としては受け入れられない技術でも「患者のため」としてより新たな技術を駆使する医師と、不妊治療を何度失敗しても「あきらめきれない」と悩む患者との相互作用を明らかにする。

そこで、もう一度「不妊とは何か」に立ち返って解決策を考える。

#### 出版後の反響

思いがけず、医療者、医師や看護婦の方から、賛同（全面的にはないにしても）のお手紙やメールをいただいた。また、いわゆる「学者」には書評等で「わかりづらい」と批評された箇所が、不妊の当事者の方やその他婦人科系の疾患の患者・当事者グループのニューズレターなどに載せていただいた書評や紹介ではかなり理解していただけていることがわかった。これらから、誰に題して書いたのか、というのが、書き上げてから、医療者や患者・当事者に自分の視線が思っていたよりも強く向いていたの



資料代：1000円

コーディネーター

坂本浩（日本放射化学会副会長・金沢大学名誉教授）  
パネリスト（五十音順）

梅本博之（核燃料サイクル開発機構）

清水和彦（核燃料サイクル開発機構）

朽山修（東北大学）

鳥井弘之（日本経済新聞社）

渡辺正実（科学技術庁）

石橋克彦（神戸大学）

上田文雄（弁護士：交渉中）

澤井正子（原子力資料情報室）

藤村陽（京都大学）

古川路明（四日市大学）

・なぜ地層処分なのか？

・安定な地質が日本にあるのか？

・人工バリアは機能するか？

・安全評価について

・高レベル放射性廃棄物対策はどうあるべきか原子力発電に伴い発生する高レベル放射性廃棄物をどのように管理・処分すべきなのか。廃棄物の地層処分は適切な方法なのか？高レベル放射性廃棄物をめぐって、市民・専門家・国・核燃料サイクル開発機構が議論を行ないます。

主催・原子力資料情報室<<http://cnic.jca.apc.org/>>

### ●科学・技術と社会の会のご案内

120th

日時：2000年5月25日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：東京大学社会科学研究所 1F 大会議室

話題提供者：鈴木 達治郎氏（東京大学）

テーマ：「原子力の技術社会学ープルトニウムをめぐる技術と社会の相互関係ー」

122nd

日時：2000年10月12日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

話題提供者：里深 文彦氏（武蔵野女子大学）

テーマ：「"文化"と"技術"をめぐる

ーCulture and Technology in Modern Japanを編纂してー」

121st

日時：2000年6月29日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：東京大学社会科学研究所 1F 大会議室

話題提供者：大塚 善樹氏（広島経済大学）

テーマ：「遺伝子組換え作物をめぐる論争について」

### ●火曜日ゼミ（火ゼミ）

科学史・技術史の研究会「火曜日ゼミ（火ゼミ）」の例会（2000年4月-5月分）のお知らせです。

「火曜日ゼミ（火ゼミ）」というのは、東工大の一室を

借りて行われている科学史・技術史の研究会で、原則として毎週火曜日の午後に行われています。参加は自由です。

運営は東工大とは一応、独立の「火ゼミ運営委員会」が運営しています。

問い合わせ先：梶 雅範 e-mail：masanori@me.titech.ac.jp

電話03-5734-2270 F A X 03-5734-2844

場所：東京工業大学 石川台4号館地下ゼミ室B02

時間：とくにことわりがない限り、午後1時20分から

<<http://www.histec.me.titech.ac.jp/course/kazemi.htm>>

火ゼミ 2000年9月-12月の予定

9月19日 Tessa-Morris-鈴木（一橋大学客員教授）

「近代日本の科学技術の発達について」

9月26日 日野川静枝

「リバプール大学のサイクロトロン開発史」

10月3日 北林 雅洋

「理科の学力の国際比較ー歴史と科学観ー」

10月17日 合宿実行委員会

「大久野島合宿その後の進展」

10月24日 伊藤 詠

「東京におけるめっき産業の展開（2）」

10月31日 山口 陽子

「Apollonius, Conicsにおける思考方法」

### ●東工大中島研究室公開セミナー「先端科学技術と社会」第38回研究

日時：2000年6月7日（水）18時30分～20時30分

内容：A Better Way to Think about Business

Robert C. Solomon (Department of Philosophy, University of Texas, Austin)

会場：東京工業大学百年記念館 第5会議室

### 第39回研究会

日時：2000年7月7日（金）18時30分～20時30分

内容：「研究開発支援体制とその論理」

綾部 広則（東京大学大学院総合文化研究科）

会場：東京工業大学百年記念館 第4会議室

### 第40回研究会

日時：2000年8月31日（木）17時30分～20時30分

内容：「日本のTLOは機能するのか」

土淵庄太郎（東京工業大学）

「STS in China」殷登祥（中国社会科学院哲学研究所 S T S 研究センター主任、東大先端研客員）

会場：東京工業大学百年記念館 第5会議室

世話人：

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島秀人・水沢光  
東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先：〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研究室  
tel/fax 03-5734-3255

e-mail nakajima@mail.me.titech.ac.jp

●科学技術社会論研究会

テーマ 「日本の近代化と技術」

今回は、明治大正期の日本における技術の歴史を題材に取り上げます。前半の岡本氏と中村氏の発表は、電力網の形成における一つの歴史的側面を取り上げるもので、特に中村氏の発表はヒューズの『電力の歴史』のモデルを日本に当てはめるとどうなるかといった問題意識から分析がなされる予定です。柿原氏の発表は、電信技師を中心として技術者集団の形成を論じるものです。最後の私の発表は、俵國一の日本刀の科学的研究を取り上げ、伝統技術の秘術的部分を近代科学的な視点から解きあかしていく過程について論じたいと思います。(橋本)

日時 7月22日(土)午後1時より

場所 東大先端研13号館(時計台の建物)1階109室

岡本拓司「創始期の電灯事業-東京府を中心に-」

中村尚史「日露戦後期における大容量水力発電所と長距離高圧送電-東京電灯駒橋・八ツ沢発電所を中心として-」

柿原泰「明治日本の技術者集団の形成をめぐる」

橋本毅彦「近代科学と伝統技術の邂逅 -俵國一の日本刀の冶金学的研究-」

高田紀代志(木原英逸氏が海外研修中事務局代行)

宮城学院女子大学 学芸学部

Tel 022-277-6186

Fax 022-277-6178(学科事務)/Email takada@mgu.ac.jp

●科勉のおしらせ

5月29日(月)17:00~

参考文献は、吉岡齊『原子力の社会史-その日本的展開-』(朝日選書、1999年4月)

とくに、現代の部分を中心に、近年の原子力をめぐる諸問題について議論ができればと思います。(文責 柿原) いままで本勉強会に参加されたことのない人で、参加されたい方は、中村まで連絡いただければ、詳細についてご案内します。

6月19日(月)

今回は、以下の二冊を紹介していただきます。社会構築主義の古典を研究しようとの試みです。

1. キツセ&スペクター『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』

2. バーガー&ルックマン『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』

日時：6月19日 17:00から、

日時：7月10日(月)6:00~

場所：駒場の科哲院生室

報告者：藤田

内容：私が現在翻訳中のDonald MacKenzie, *Inventing Accuracy*(Cambridge, Mass.: MIT Press, 1990)の紹介。ということで行いたいと思います(都合上、6時からの開始に

させていただきます)。

今回とりあげる本は、ストロング・プログラム以降うみだされたSSK(科学知識の社会学)の諸研究のなかで、最も水準の高いモノグラフといえるものです。扱っている題材は、核ミサイルの誘導システムです。その命中精度に関する技術的知識の構成過程がストーリーの軸です。

前回小川氏に、構築主義の古典を二冊解題してもらいましたが、その際も科学技術論における構築主義アプローチのケーススタディとして本書が言及されました。

今回の報告では、一冊全体をまんべんなく紹介するのではなく、理論的に面白い議論を含んだ部分を中心に紹介するつもりです。

●『サイエンス・ウォーズ』合評会のお知らせ

日時：2000年9月11日(月) 午後3時から

場所：東京大学先端科学技術研究センター13号館208室

コメント：平川秀幸、隠岐さや香ほか

『サイエンス・ウォーズ』では、ここ数年話題にのぼっているサイエンス・ウォーズでの議論の詳細な紹介と検討から始まって、社会構成主義・科学知識の社会学(SSK)の展開を振りかえり、さらに遺伝子研究、生殖、環境運動の知識政治学的な個別研究、と盛り沢山で刺激的な議論がなされています。

ここ20年くらいの科学論について、ひとつのまとまった見解が出されたと言えるでしょう。

そこで、この合評会では、著者を迎えて、そこで扱われている内容についての議論をするのはもちろんのこと、さらにそこから、今後の科学論の展望についても議論ができればと思います。

●国際基督教大学 キリスト教と文化研究所 公開講演

日時：9月22日(金) 13:30-15:00

場所：国際基督教大学 教育研究棟 ERB257-259

講演者：川島慶子助教授(名古屋工業大学・科学史)

題目："バリ科学アカデミーと女性—フロントネルの「侯爵夫人」—"

<<http://subsite.icu.ac.jp/icc/>>

●パネルトーク

「サイエンス・ウォーズ」を/から考える

佐倉統(東京大学)氏

茂木健一郎氏(ソニー・コンピュータサイエンス研究所)

日時：2000年8月28日(月) 19:00~21:00

会場：青山ブックセンター本店 カルチャーサロン青山

お問い合わせ先：03-5485-5513

参加条件・注意事項：要電話予約。入場無料。

■95年頃から欧米を席卷した、いわゆる「サイエンス・ウォーズ」。

科学者、科学論・科学哲学論者、人文思想家を巻き込んだこの現象の実態を説き、日本における建設的な議論の可能性について討論する、おそらく本邦初の本格的公開討論となるでしょう。



### ●板倉聖宣氏講演会

「楽しい科学の伝統にたちかえる科学と科学教育の源流—板倉聖宣科学史講演会—」最近、板倉聖宣氏が『科学と科学教育の源流』『科学者伝記小事典』を相次いで出版されました。そこで、この機会に板倉さんのお話を中心に「科学と科学教育」の楽しさ、その方法と可能性について存分に味わおうという会を企画しました。ぜひ、お友達もお誘い合わせのうえ、ご参加くださるようご案内いたします。

日時 2000年9月23日(土) 午前10時—午後4時半

場所 お茶の水スクエアC館 4階C会議室

定員 180名

参加費 6000円 前売り5000円(9月8日消印まで)

申し込み締め切り 9月14日 または定員に達し次第

#### 講演内容

板倉聖宣(私立板倉研) 科学史と科学論の原点  
板倉聖宣(私立板倉研) 板倉式科学研究方  
永田英治(宮城教育大) 楽しい科学の継承—「ルパート王子の涙」・鉛の圧着実験  
吉村 烈(大阪・高津高) 壊血病を解決した人たち  
岡本正志(大阪女子短大) 蝶は花粉をはこんでいるか?

#### 連絡先

黒田礼子 〒121-0061 足立区花畑6-12-5-502

Tel/Fax 03-3850-9515

### ●生物学史分科会7月例会

日時:7月29日(土)午後3時~

発表者:宮崎順子氏

演 題:昭和初期における医療活動

—東京女子医学専門学校の夏期無料診療—

\*宮崎氏は東京女子医科大学大学史料室勤務。

戦前期日本の医療、特に植民地での医療活動と女性医師の歴史に関心をおもちで、東京女子医学専門学校の卒業生らの活動について史料に基づいてお話しいたします。

会 場:東京大学駒場キャンパス14号館3階303号室

### ●京都人類学研究会2000年度第一回季節例会

PWH(HIVウイルスとともに生きる人々)と南北問題

日時 2000年7月8日(午後1時半から4時半)

場所 京都大学 人間・環境学研究科棟 B23(A)

総合テーマ

「PWH(HIVウイルスとともに生きる人々)と南北問題」

#### 話題提供者

色平(いろひら)哲郎さん (アイザック事務局長・長野県「厚生連」佐久総合病院)「地域医療と外国人PWH:アジアのムラと日本のムラ」

道信良子さん(お茶の水大学大学院)「タイにおける開

発とエイズとジェンダーを考える」

コメンテーター 田邊繁治さん(国立民族学博物館)

お問い合わせ先 学生幹事:春日匠

E-Mail: skasuga@mars.dti.ne.jp

<<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/>>

### ●医療倫理学研究会

日時:原則として毎月偶数週の木曜日(第2・第4木曜日)午後6時半ころから

会場:医療文化研究センター

〒530-0047 大阪市北区西天満4-11-8-308

phone/fax:(06)6366-5402

今年度のテーマ:人体実験の倫理学/生命倫理学の成立史/医療倫理学のための医学概論 ほか

検討予定の文献:土屋貴志「インターネット講座・人体実験の倫理学」草稿(<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/~tsuchiya/vuniv99/vuniv-index.html>)G. ベンス『医療倫理』(1・2、みすず書房、2000年)ほか

世話人:土屋 貴志〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学文学部 e-mail: tsuchiya@lit.osaka-cu.ac.jp fax:(06)6605-2357

\*詳しい例会のご案内は電子メールにてお送りしますので、上記土屋のメールアドレスまでご一報下さい。

### ●●文献情報●●

●『科学史・科学哲学』No.15、2000年

定価 1500円、東大科学史科学哲学研究室

—目次—

\*Tributes 廣松渉先生追想

廣松さんとの雑談—電車の中で 廣野喜幸

特集:科学論のアクチュアリティ

\*インタビュー 科学論のアクチュアリティ 米本昌平

\*インタビューを終えて

国家単位で語る事への違和感 篠田真理子

残された疑問 藤田康元

攻撃的な読み手の組織化とは 柿原泰

\*書評

佐々木力『マルクス主義科学論』を読む 藤田康元

\*論文

「遺伝子組み替えの安全性」問題をめぐる知識の社会的構成—遺伝子組み替え食品はどうして科学論の問題になるのか 林真理/一人称権威と他者の心 金杉武司/他者の心

フッソールとハイデガーにおける心の哲学の展開 原塑

\*研究ノート

科学的知における認識論的革命—解析と確率論、そして社会数学をめぐる知的活動を通じてコンドルセの果たした役割を探る 隠岐さや香

\*論文

\*論文

和算家沢口一之に関する逸話—「円理」を巡る伝承について 佐藤賢一

・Eメールまたはハガキでご請求ください/振替用紙を同封で雑誌をお送りします/到着後郵便局でお振り込みください

・Eメールまたはハガキでご請求ください/振替用紙を同封で雑誌をお送りします/到着後郵便局でお振り込みください

東京大学大学院 総合文化研究科  
科学史・科学哲学研究室博士課程  
篠田真理子(QWM00475@nifty.ne.jp)

藤田 康元  
(153-8904目黒区駒場4-6-1 東京大学先端科学技術研究センター 橋本毅彦研究室気付)

●板倉聖宣『科学者伝記小事典』（仮説社）、1900円。  
知っていると思っていた科学者の項目を書き始めると意外に実は知らなかった、という板倉先生の発見には同感。  
久々に仮説社の本を手にしました。書籍のリストを見るのも楽しいです。

●西村吉雄『情報産業論』（放送大学テキスト）、1600円  
アウトソーシング論、この指とまれ論、中央研究所の終焉など、興味深い項目が満載されています。  
(以上2件、中島さんより紹介)

●ベックの『危険社会』の全訳がすでに出ているのに気が付きました。  
その書評が『思想』6月号 (no.912、162-166頁) に出ています。

ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局、1998年、492頁、4700円  
原著は1986年、その抄訳が同じ著者らによって1988年に出されていましたが、1998年10月に全訳が出ていたとのことです。書評者は、京都精華大にいる生物学史家の斎藤光氏です。  
(梶雅範氏より)

●『JCO臨界事故と日本の原子力行政—安全行政への提言』JCO臨界事故総合評価会議著 七つ森書館 2000年9月27日発行

1999年9月30日に起きたJCO臨界事故について、原子力資料情報室と原水爆禁止日本国民会議が組織した「JCO臨界事故総合評価会議」がこのほど最終報告書をまとめ、発表しました。

JCO臨界事故について各側面から独自の検討を行ない、原子力安全委員会事故調査委員会による事故調査を批判するとともに、東海村の現地調査などもおり込み、多大の衝撃をもたらしたJCO臨界事故の真実と、事故が日本の原子力政策に突きつけた課題を描き出しています。

購入・問い合わせは  
原子力資料情報室/原水爆禁止日本国民会議/七つ森書館まで。

もくじ  
はじめに 古川路明  
JCO臨界事故総合評価会議メンバー  
各章の要約  
政府への提言[#]

序章 伴英幸

第1部 事故の経過と原因

第1章 東海村臨界事故 経過と原因に関する考察 古川路明

第2章 放射線被曝と健康への影響 上澤千尋

第3章 事故原因について 伊東良徳

第4章 原子力安全行政の破綻と安全行政の独立のために 海渡雄一

第5章 核燃料サイクル開発機構（旧動燃）の責任について 伊東良徳

第2部 事故の影響

第6章 事故に係わる防災上の対応について 末田一秀・中村義彰・山本貞明

第7章 東海村民と那珂町民の被害・不満・不安—住民生活影響調査から—

長谷川公一・田窪祐子・根元がん

第3部 事故の社会経済的側面

第8章 原子力産業の現状とJCO臨界事故 西尾漢

第9章 JCO臨界事故における損害賠償 河合弘之

第10章 JCO事故とその対応に見る原子力開発体制の問題点 平田光司

おわりに 佐藤康英

[#] 政府への提言

1. 臨界事故の再調査を民間の第三者機関によっておこなうこと
2. 放射線被曝者に対する心身のケアについて十分な配慮をすること
3. 原子力施設の安全審査の体制を全面的に見直すこと
4. 放射線に関わる教育訓練を強化すること
5. 事故の際の防災体制を抜本的に見直すこと
6. 核燃料物質の計量管理を厳格におこなうこと
7. 日本の原子力の現状について徹底的な見直しをすること

●清水忠男・岡本義行編『地域における大学の役割』日本経済評論社、2000年3月 1600円+税

「法政大学多摩地域社会研究センター第15回法政大学多摩シンポジウム報告書」ということで、99年10月8日に多摩大学で開催されたシンポジウムの報告、討論をもとに編集された本のようなようです。

まだざっと見た程度なのですが、1部では、地方自治体の政策形成に大学がどのように関われるのか、あるいはそれを期待されているのか、という点を、数人の市町村長をパネラーに議論されているようです。

2部は、中小企業やベンチャーなんかに対して、大学がどんな役割をはたせるのか、ということが論じられているのかな？

基調講演は、イタリアで、企業家たちがあつまって作られたカルロ・カッターネオ大学の学長による講演のようです。（中村氏より）

●金森修さんの『サイエンスウォーズ』東京大学出版会（3800円）が出版されました。

金森さんがここ数年に『現代思想』『思想』に発表された論文に書き下ろしを二編加えたものです。

私自身は、半分くらいを初出のときに読んでいたのですが、改めてまとめたものを手にして、面白さのあまり二晩で読み終えてしまいました。ただし、サイエンスウォーズについてまとめた本というよりも、70年代以降の科学論を（濃淡はあるにせよ）コンパクトにまとめたものとして楽しんだように思います。特にII部は私には最高でした。（調氏より）

●インドで発行されているSTSの国際的雑誌

Science, Technology & Society: An International Journal  
Devoted to the Developing World\_vol. 5, no. 1 (January - June 2000)

が手元に届きましたので、目次を紹介します。

[Articles]

Wesley Shrum and Patricia Campion

Are Scientists in Developing Countries Isolated?

Sandra Rothboeck

Information Technologies and Late Development:  
Innovative

Capacity or Hidden Reproduction of Core-Periphery  
Cleavages?

[Research Notes]

Mammo Muchie

Barriers to the Uptake of Cleaner Technologies in African  
Countries: The Case of Tanzania

[Commentaries and Reports]

UNESCO (Paris)

World Conference on Science-'Science for the Twenty-first  
Century: A New Commitment' (Declaration on Science and  
the

Use of Scientific Knowledge)

R. Ramachandran, A.R. Vasavi, Anindya Sinha and R.  
Narasimha

'Science in Society: A New Social Contract'-A Report on the  
Bangalore Symposium

[Book Reviews] 略

[Book Notes] 略

(かきはら氏)

●米本昌平+松原洋子+ぬで鳥次郎+市野川容孝『優生学  
と人間社会』（講談社現代新書、2000年7月）

本書の目的は、遺伝子を扱う技術が発達させた現代社会  
は、優生学や優生思想の理想を実現していくのかという問  
いから、優生学および優生思想の歴史の実態を明らかにす  
ることにあるとされています。新書ながらアメリカ、ヨー  
ロッパ、日本と各国の事情についても個別にふれられてお  
り、「これまでの優生学論とは違う、世界的にも類書のな  
い本」(p.278)のようです。（綾部氏）

●年報『科学・技術・社会』第9巻のご案内

1992年に創刊されました科学・技術と社会の会の機関

誌、年報『科学・技術・社会』の第9巻が、2000年6月30日  
に刊行されました。創刊以来多数の反響が内外より寄せら  
れています。以下のとおり、ご案内させていただきます。

執筆者・タイトル：

小川慎一（東京大学）

「作業者による品質管理体制の展開－東芝府中工場の事  
例－」

石川千草（京都大学）

「1970年代前半のゼロックス社パロアルト研究所におけ  
るAltoをめぐるコンピュータ開発思想について」

渡部康一（科学技術庁）、藤垣裕子（東京大学）

「日本の科学技術における優先投資分野の政策分析  
－ライフサイエンスにおける政策変遷、予算および論  
文生産の推移をめぐって－」

John Ziman (FRS, University of Bristol)

"'Postacademic Science': Constructing Knowledge with  
Networks and Norms"

責任編集：松本三和夫（東京大学）

協力編集：吉岡 斉（九州大学）

発行：科学・技術と社会の会

発売：弘学出版（株）

協賛：研究・技術計画学会

ISSN 0919-9942

定価：2,000円（税別）会員の皆様には従来どおりの価格で  
お手元に届きます）

お問い合わせ：〒214-0034 川崎市多摩区三田 4-12-5

弘学出版（株）

TEL.044-911-8771 FAX.044-911-1159

（郵便振替口座00290-5-6944 書店でもお求めになれます）

●an・anの今週号（10/13）の特集は“遺伝子が決める、  
あなたの運命。”です。噴飯ものであるとともに、恐ろし  
くもありますので、興味のある方はぜひご覧ください。ま  
た、遅ればせながら話題のベストセラー『話を聞かない  
男、地図が読めない女』主婦の友社を読みました。新遺伝  
（子）決定論の台頭に、新たな論敵発見とばかりに盛り  
上がっています。（調氏より）

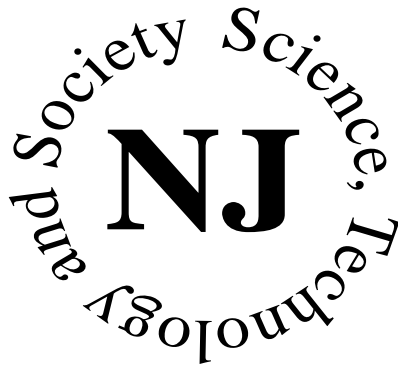
●●ウェブサイト●●

●今日の朝日新聞にも記事がありましたSun Microsystems  
のビル・ジョイが、Wired誌で発表したエッセイ「なぜ未  
来は我々を必要としないか」、なかなか面白いです。

原文は "Why the future doesn't need us. Our most powerful  
21st-century technologies - robotics, genetic engineering, and  
nanotech - are threatening to make humans an endangered  
specie."で、

<<http://www.wired.com/wired/archive/8.04/joy.html>>

で読めます。e-mailでの配信もしてくれます。（平川氏よ  
り）



### 編集後記

もはやイベントの枕詞ですが、20世紀最後のニューズレターです。  
発行が大幅に送れて遅れてごめんなさい、です。

(できればもう一号出したかった)

でも、内容は充実したものになったのではないのでしょうか?

(私の手柄ではありませんが…)

今年は忙しい年末になりそうですが、みなさんに神戸でお会いできればうれしいです。

K.S.

Newsletter Vol.11, No.2 (通巻No.39)

2000年11月30日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter編集委員会

代表 隠岐 さや香/委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 隠岐 さや香

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

広域システム科学系

藤垣裕子研究室気付

FAX:03-5454-6990

E-mail: office@stsnj.org

WebSite: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 3,500円)